

Title	書評: 玉野和志著 『東京のローカル・コミュニティ:ある町の物語1900-80』 東京大学出版会、2005年
Sub Title	
Author	松尾, 浩一郎(Matsuo, Koichiro)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2006
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.11 (2006. ) ,p.108- 113
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20060000-0108">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20060000-0108</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

---

書評：玉野 和志著

『東京のローカル・コミュニティ——ある町のお話 1900-80』

東京大学出版会、2005 年

松尾 浩一郎

---

## I

読み手に多くを訴えかける、そんな力強さを内に秘めた作品が刊行された。玉野和志著『東京のローカル・コミュニティ』がそれである。

本書は東京の都心部にほど近い「ある町」の約 80 年を描いたモノグラフである。当地をフィールドとして 20 年にもおよぶ社会調査を重ねてきた著者は、その成果をモノグラフとしてまとめ上げることをかねがね予告していた。こうしてついに待望の一冊が届けられたわけである。

本書は一見してわかる顕著な特徴がある。著者が言うように「全体を小説風の物語として叙述している」のである。分量も決して大きくはない。統計表や生データの引用や注などは最小限に止められ、ともかく読みやすく書かれている。もし 20 年にわたる調査の集大成にふさわしい「重み」を期待するならば、肩透かし以外の何物でもないかもしれない。

なぜ小説風の体裁がとられているのか。それは読み手の想定があつてのことである。一般読者に広く社会学の成果を伝えたいからだという。しかし研究者コミュニティを軽視しているわけではない。むしろその背後には、今日の研究者に対して強く訴えかけようとする意図が見え隠れしている。それは、いかにして研究成果を伝えていくのかという、学問活動の土台となるコミュニケーションの作法に関するものである。著者は「はしがき」において、日本の社会学者による調査モノグラフの問題を次のように指摘する。

「長大な資料をそのまま提示したような、読む側に相当な忍耐を強いるか、作者以上のデータ解釈の力量を求めるような作品が多いのである。それらの困難を克服した者だけが学術的な意義を知りうるといわんばかりである。ところが、そうこうするうちにそのような読み通すのが困難な作品に蓄積されてきた実証研究の成果や到達点が、次の世代に引き継がれないという事態が目立ってきた。」(i 頁)

日本の社会学における学問的継承体制の不充分さの原因が、ほんとうに作品の「読みづらさ」であるかどうかは、ここでは問わないことにする。また、長大な資料を提示することが「読みづらさ」に直結すると断じることには異論なしとはしない。しかし、過去の知的遺産により深く向き合うべきだとする著者の言外の主張は、まったくもって正当なものだと思われる。

そしてそのような認識にもとづいて、実際に自身の研究成果をこれほどまでに親しみやすい体裁で世に問うた筆者の試みに対しては、大きな敬意を表したい。だがそれは同時に、読み手であるわれわれに、本書に正面から取り組み内容を十分に吟味する義務を課すものでもあるように思われる。

## II

内容の検討に進む前に、本書の概要を整理しておくことにしよう。まず目次構成を示すと以下のとおりである。序論に相当する第1章と結論である第6章とのあいだに、4つの「物語」が挟み込まれている。

- 第1章 東京の発展と「この町」の成立
- 第2章 町内社会の成立と展開
- 第3章 お神輿と町内社会の世代交替
- 第4章 母親たちの挑戦
- 第5章 もうひとつの地域
- 第6章 さらなる都市化と地域の変貌
- 付録 方法論的な補遺

第1章では序論として、対象地である「この町」のプロフィールを、東京の都市化過程の文脈に位置づけながら描き出している。具体的にいえば工業地帯の発達、郊外住宅地の形成、中枢管理機能の肥大化という3つの大きな力が、「この町」の性格を定めていったことが述べられている。そして、「人間集団が土地に住みついて生きるという普遍的なできごと」を「近代の都市化という特殊な状況において詳細に描く」（5頁）という課題が設定される。

第2章では、3人の町内会長の生活史を軸にして、「町内社会」と「町内会体制」の確立過程が示される。「ある町」においても明治期までは、地域社会に関与するのは地主などごく一部の層に限られていた。しかし大正昭和における総動員体制の形成過程のなかで、さまざまな層からなる住民が等しくアクターとなりうる「町内社会」が成立していった。また、高度成長期に完成する「町内会体制」が、移住者がその核をなす自営業者層などに社会的上昇の機会（つまり町内会）を与えたということも、本章での重要な知見である。

第3章では、1970年代末に「再興」された祭礼で活躍する神輿会を事例に、「町内社会」の枠組みが世代間の対抗関係をはらみつつも、しかるべき層（この町に生まれ育った自営業者や実業家の二代目層）に継承されていくさまが描かれる。「創られた伝統」である神輿の渡御を支えるものは、この町に根を下ろし、この町という空間内での再生産を希求しはじめた二代目層（おおむね団塊世代前後の男性に相当する）の「子どもへの思い」であるという。

つづく第4章は本書のハイライトとなる章である。子育ての社会的困難に直面した団塊世代

前後の母親たちが、児童センターの建設を求めて立ち上がり、彼女らの請願運動がおおよそ 10 年間の紆余曲折を経て「地域文化センター」の開館へと展開していく過程を追っている。住民による共同防衛という論理から出発した運動が、コミュニティ行政に絡めとられていく経緯は、あたかも推理小説の謎解きを読むようである。第 2 章と第 3 章が「この町」の基盤となる秩序の形成と継承の過程であったとすれば、本章はそれと競合する新しい秩序が、まさにコミュニティに生まれんとする瞬間を捉えている。

第 5 章では「この町」に創価学会に属する人びとが少なからず暮らしていることに着目し、彼ら彼女らの地域社会とのかかわりを探ろうとしている。比較的階層の低い都市来住者に創価学会がアピールした理由に、もともと地域社会に位置づけを持たなかった人に「もうひとつの地域」を用意したことがあるのだと解釈する。そして近年、従来の「町内社会」と創価学会の「もうひとつの地域」とが溶解し、ひとつの政治的勢力になりつつあることが述べられる。

第 6 章では、1980 年代以降のさらなる都市化の奔流にさらされた「この町」が、再開発や脱地域志向の新住民の流入などによって、大きな変化を余儀なくされはじめたことが示される。しかし他方で、地域社会に埋め込まれ堆積してきた「連帯の記憶」が、いまもなお消えずに残っているとも述べられる。たとえば今日の「この町」では、かつて母親たちが取り組んだ子ども活動に参加した世代が、父親たちが創った神輿の担ぎ手として活躍しているのである。こうして著者は、ローカル・コミュニティには「今いる人ともういない人とが作り出すもうひとつの社会」(278 頁)も息づいているのだと主張する。そして、今後の町の再生産を担うことになる若者層は果たしてその役割を果たしうるのだろうか、という問いを投げかける。未婚率の高さ、望んでも住み続けることは簡単ではない環境……。歴史的な文脈を深く掘り下げてきた本書は、逆に未来へのつながり方という課題を鋭くえぐり出すことで、その物語に一応の幕を下ろす。

### III

本書には確かに、われわれが従来親しんできた日本のモノグラフとは、すいぶん異なる手触りがある。その相違点は、文章としての読みやすさであるとか、膨大な資料をそのまま提示するかどうかといった、表面的な体裁の次元だけにとどまるものではない。

まず指摘したいのは、フィールドでの個々のできごとを整理し再構成していく際に、地域内の当事者の次元で意味づけ解釈することには重きが置かれず、むしろ、よりマクロな構造であるとか、外部とのつながりを準拠点とするケースが多いことである。取り上げられるエピソードのひとつひとつが、一般的な社会経済史の流れの上にプロットされたり、人口構造の変化の帰結として把握されたりしている。町内社会と創価学会の融合というエピソードにしても、あえて「二つの勢力の接近という事実の背後には、はっきりとした社会経済的な根拠が存在する」(272 頁)と念を押し、創価学会会員層の社会移動、自民党の政治体制の変容、ホワイトカラー化の趨勢など、町のレベルを大きく超えた問題と絡めて分析されている。こうした特徴

は必然的に、ひとつひとつのできごとが、著者の説明なり解釈といったフィルターを経て記述されていくことにつながる。したがって読み手によっては、説明的に過ぎる印象を受けるかもしれないし、あるいは無駄なく組み立てられたストーリーに感嘆させられるかもしれない。

そして何より指摘すべきことは、かなり徹底的に固有名詞が排されていることである。仮名の使用さえ抑え気味で、しばしば主語が曖昧にぼかされている。山田さんとでも鈴木さんとでも仮名で表現すればすっきりするような場合でも、「最初の人物」であるとか「第二の人物」などと抽象的な語で人物を説明していることが多く、違和感が拭いきれない。したがって、文体上の平易さとは裏腹に、いつ誰が何をしたのかを確認しながら読み進めることは、案外難しい。固有名詞を使わないという点では、柳田國男が『明治大正史世相篇』でとった記述戦略を思い起こさせる面もある。しかし柳田は普遍化されたエピソードを普遍的な語り口で書いたのに対し、本書は特殊具体的なできごとを普遍的に描こうとしている点で、両者には本質的な相違がある。

ここで指摘したふたつの点からも分かるように、モノグラフという研究スタイルないし表現形態について、本書は通念的な考えとは異なる認識を有している。つまり、モノグラフの本義を個性記述とは見なさないのである。評者が本書から読み取った限りでは、モノグラフにとって最も重要だと筆者が位置づけていることは、フィールドで生起する「集合的な力の構造的な絡み合い」（140頁）を具体的なできごとを題材に描き出すことなのではないかと思われる。（筆者の手になるモノグラフ論も発表されているので、併せて参照されたい。玉野「魅力あるモノグラフを書くために」、好井裕明・三浦耕吉郎編『社会学的フィールドワーク』世界思想社、2004年。）

つまり、やや極論になるかもしれないが、本書での記述・分析の単位は、そもそも個人ではなく、むしろ様々なものの絡み合い方、つまり関係性にこそ置かれているようである。もちろん個人の経験がないがしろにされているわけではなく、調査過程のなかでは詳細な生活史の聴き取りも行なわれており、生活史データも存分に活用されている。しかしそれは、関係性の網の目を構成するコマのひとつとして位置づけられており、それ以上個人の生活史に深入りすることはない。ネットワーク分析との思想上の相似性すら感じさせる。先ほど評者はいつ誰が何をしたのかを確認しづらいと書いたが、どうやら本書の焦点は、こうした個々のできごとの記述から一步踏み出すことにあるようである。

関係性を重視する視点や構造的なものを描き出そうとする試みは、著者の「普遍性」へのこだわりと響きあう。本書を読むとたびたび「普遍的」という言葉が頻出する。とりわけ第4章では数え切れないほど繰り返される。この「普遍性」へのこだわりは、スタイルの面でも内容の面でも、間違いなく本書の骨格をなしているといえるだろう。

しかし固有名詞を避けるという本書の試みが、果たして著者のいうように「普遍性」を獲得できているかについては、検討の余地が残されているように思われる。たとえば、「読み通すのが困難な」モノグラフを書いた日本人社会学者の一人である有賀喜左衛門は、その著『大家

族制度と名子制度』において、歴史学者の史料批判をも思わせる態度をとり、いつ誰が誰に対して何をしたのかを具体的な資料を積み上げながら記述していった。しかしそこに果たして「普遍性」がなかったといえるだろうか。読者にとっては、斎藤姓がずらりと並ぶような固有名詞の洪水の中にこそ、物語とリアリティと「普遍性」を見出していたのではないだろうか。

いずれのスタイルがより高い「普遍性」を獲得できるかについて、その優劣を一面的に断じることが不可能であろう。ただ、本書は固有名詞を過剰にまで排することで、もはや現代大都市のローカル・コミュニティにおける人と人の関係性は、匿名性で覆い尽くしたほうがむしろリアリティがあるのだと示唆しているのかもしれない。

しかしやはり匿名性を高めるというスタイルは、いくつかの無理をもたらしてもいる。たとえば、郷土資料や行政資料などは、明示的には引用されていない。これは恐らく「この町」が特定されないようにすることが目的であろうから、おおむね妥当な措置だといえるだろう。しかし、著者がこれまでに発表してきた「ある町」に関する論文や報告書も、同じように一切伏せられてしまっている。調査対象者を保護する重要性は言を俟たない。けれども評者としては、一定のジレンマを感じつつも、読者がより深く本書の意味を掘り下げていく道が狭められることをおそれる。たしかに専門研究者ならば、どのような関連する論文があるのかは自明のことであろう。しかし本書のそもそもの立脚点からすると、新しい世代の研究者への働きかけを自粛する必要はないのではなかろうか。

#### IV

もはや残された紙幅も少ない。本書が捉えたローカル・コミュニティの姿かたちについて、駆け足でコメントを加えておきたい。

何よりとりわけ新鮮に感じられることは、「再生産」「世代交代」といった時間的な側面を前面に出して、現代大都市のローカル・コミュニティという空間を再定義していることである。社会の研究にとって歴史性が重要であることは、近年とみに認識が高まっているように思われる。しかしその歴史の流れを、具体的にどのような社会的なつながりにおいて読み解くのかについては、納得のいく答えが出ない場合が少なくなかった。本書は「町内社会」の成立とその展開を、そこに住む家族の再生産、親から子へのつながりから、説明していこうとする。なんとなれば、「住みついて生きる」(5頁)という点では、地域と家族は根を同じくしているからである。

地域と家族の深い結びつきを重視する点や、継承の問題に着目する点では、在りし日のイエとムラの理論と相同関係があるように思われる。とはいえ、それらの古典的理論を直接当てはめたり無理に応用しようとしている印象はない。「この町」を徹底的に調査した結果としてこのような相同に達したのであれば、大きな驚きである。

とはいえやはり、こうした手法で捉えられた時間的空間的な社会的関係の網の目は、ひとつのコミュニティ全体を覆い尽くすには心もとない、決して濃密とはいえないものになっている。

いうまでもなく「この町」は、いかに自営業者が多かろうとも、生産という深い次元で地域と家族が相互浸透していた伝統的村落社会とは、まったく異なった条件下にある。本書がコミュニティなるものの核として位置づける縦横の「社会的つながり」は、著者自身も「うつろいやすく、ともすれば消えてしまいそうなかたち」(20頁)のものに過ぎないと述べる。だから第2章から第5章の4つのエピソードも、こうしたつながりの上で「綱渡り」をするように関連付けられており、本書が「明快なストーリーを提示」(i頁)しているわりには、そこに立ち現れるコミュニティ像は、単純明快なものとはいかぬ。

評者が考えるにこの「綱渡りの感覚」は、本書が提示する都市コミュニティ観そのものを象徴しているように思われる。本書や筆者の既発表論文を読む限り、筆者の手にあるデータをうまく利用すれば、さまざまなかたちをコラージュさせて、より重層的で濃密な印象のあるコミュニティとして「この町」を描くことも可能だったはずである。しかし、個人を分析単位としていなかったのと呼応するかのように、簡単に個々のできごとをもってコミュニティ像を代表させることはしない。少々の無理を冒してでも、あくまでも社会関係の堆積としてコミュニティを把握しようとするのである。

同じように社会関係の堆積として都市社会構造を捉えようとした先達として、鈴木栄太郎の名を挙げることができる。しかし彼が到達した「都市社会学原理」は、社会的交流の堆積がただちに地域的な社会的統一になるとする信念に固執した結果、そこに生きる人々の世界に迫ることのない静態的な構造しか描けずに終わっていた。本書の試みは、社会関係を共時的なものだけに限らずに、過去や未来へのつながりをも織り込んでいくことによって、鈴木の失敗を乗り越えようとするものだともいえるだろう。

本書は極めて平易に書かれている。平易に書くことによって、枝葉末節の話題に紙面を費やすことはなくなり、自然と書き込まれる論点は増加する。それは、隙のない学術論文には見られないような弱みをさらけ出すことにもつながる。本書にもこうした一面があることは否定できない。しかしそうであろうとも本書には、現代日本における「社会的なつながり」に関心を持つすべての人にアピールするような、汲めども尽きぬ「何か」が湛えられていると評者は考える。本書を出発点とした議論が広くかわされることを期待したい。

[本体価格 5,880 円]

(まつお こういちろう 日本社会事業大学他非常勤講師)